

埋められたアオサギ営巣地



△まえがき▽

新産業都市・道央ベルト地帯の中核的拠点である苦小牧地方では、目まぐるしいまでの様相を呈して急ピッチに開発がすすめられている。

掘り込み式人造港として、港区拡張・施設整備をしている苦小牧工業港をとり巻いて巨大なアルミ生産基地をめざす日本軽金属工場・石油基地をはじめとして、遠く千歳市・恵庭町におよび、

苦小牧郷土文化研究会

地域に数十の工場の建設が計画されている。その業種は多種多様にわたり、まさしく産業の百花擗乱的様相である。こうした業種の生産過程において発生してくるものは、自然との抗争である。自然

の姿を变形していく「産業の自然征服」という猛威の事実は不可避となるであろう。

新産業都市の建設といい、観光開発といい、いずれも自然現象の人的破壊が、日本全国にどれほど大きな打撃を与えているか枚挙にいとまがない現状である。

私どもは、このような事態に対処しながら、それは歴史の一ページのほんの一コマ

にすぎない微力な塊りではあるが、自然保護という課題ととり組み、積みかさねた経験から苦小牧地方の実状を報告することにした。

① 荒らされる樽前山

高さ一、〇二四メートル、円頂丘（ドーム）を持つ樽前山の特異な山容は、室蘭本線の車窓からよく眺められ、多くの人に親しまれている。

非常に広い裾野を持つ山であり、生育している植物の種類はじつに多い。登山バスのターミナルにある七合目ヒュッテを境に森林とお花畑が区画されている。

はじめに、苦小牧市街地近郊から七合目にいたる広大な森林部に繁茂する樹木の種類を、金田一氏の調査によってあげよう。

- ヤチダモ、ミズナラ、ヤマハンノキ、アサダ、ドロノキ、ハリギリ、キハダ、カエデ、エゾヤマザクラ、イタヤカエデ、アズキナシ、サワシバ、アオダモ、ホオノキ、ヤマグラ、コシアブラ、コブシ、シナノキ、シラカバ、エゾノウワミズザクラ、イヌエシジユ、カツラ、ハルニレ、オヒヨウニレ、ナナカマド、ウダイカンバ、ダケカバ、オニグルミ、バッコヤナギ、ミヤマハンノキ、ミヤマザクラ、ハシドイ、ミズキ、エゾイタヤ、ハウチワカエデ、ニガキ、ヤマウル

シ、ハクウンボク。

お花畑や山頂付近の高山植物にはどんなものがあるだろうか。宗広光明氏の調査によってみる。

- エゾイソツツジ、ホツツジ、マルバシモツケ、ウコンウツギ、イワブクロ（タルマイソウ）、シラタマノキ、ミヤマヤナギ、コメバツガザクラ、イワヒゲ、ツガザクラ、ガンコウラン、モウセンゴケ、コケモモ、ウラジロタデ、ハナヒリノキ、アキシバ、ショウジョウバカマ、イワギキョウ、ヒカゲカズラ、アスヒカズラ、マンネンズギ。

これらの植物は、四季それぞれにすばらしい景観を提供してくれる。学術的にも貴重なものが多い。しかし、近年は登山者（むしろ観光客）の増加により、植物群が目にみえて荒らされてきた。七合目ヒュッテの登山者名簿をみると、

昭和三十八年	四九、〇二九人
三十九年	五一、九七九
四十年	七一、六四〇
四十一年	七九、一五六
四十二年	八九、一〇二

という急増ぶりです、五年間で登山者が倍増しているのです。とくに最盛期の七、八月には、貸切バスをつらねて一日に一、〇〇人以上も登るので、バスターミナル付近のエゾイソツツジの群落は一面にふみ

つけられ、枯死している。

登山ルートをたどって登れば植物はふみつけられないのだが、メチャメチャに最高点めざして直登する者、ルートの道標を引き抜く者があとをたたない状態である。高山植物を掘りとりつて持ち帰る者も多く、管理人の久大保定一氏は見つけ次第注意しているが、広い斜面に多数が押しかけたため手が廻らないありさまである。

また、円頂丘は、早くから苦小牧市文化財に指定され、破壊しないよう呼びかけているが、ドーム登山禁止を守らず登る者もあとをたたない。

こうした現状にかんがみ、苦小牧郷土文化研究会では自然保護運動の一環として、樽前山の全容をカラー映画・スライドにして保存しようとする準備をすすめている。記録するのは前述の植物をはじめとして、エゾリス、シマリスなどの動物、さまざまな野鳥、山開きなどの行事を予定し、一部は昨年からの撮影を開始した。

②ウトナイ湖周辺と白鳥

石狩低地帯の南部は勇払原野と呼ばれ、湿原植物と海浜植物が混在する地域として古くから植物学者の注目の的であった。

汀線近くにはイヌタデ・ドクゼリ・ヌマゼリなど、その後方にハマナス・ホザキシ

モツケ・マツヨイグサの群落がひろがり、その中にハマエンドウ・レンリソウ・クサフジなどがある。湿原にはナガホシロワレモコウ・アブラガヤが多く、その中にミズギボウシ・ミズオトギリ・エゾリンドウがある。

また、湖の東岸にはミズゴケが発達し、この上にエゾイソツツジやクロミノウグイスカグラ（ハスカップ）の小低木があり、モウセンゴケの群落も発達している。沼の中にはヒシの大群落がいたるところにありセキシヨウモ・タヌキ・モエビモなどの沈水植物、ヨシ・マコモ・ガマ・イなどの挺水植物が群落をなしている。

中居正雄氏は、十年来ウトナイ湖周辺を踏査して、じつに七四科二六八種の植物を確認している。

苦小牧工業港の掘りこみが進むにつれ、掘り出された土砂が勇払原野に投げすられ工場用地・住宅用地に造成されつつある。この四月には、ウトナイ湖西岸一帯の埋めたてがあり、湖の汀線まで土砂が埋まってしまう。ダンブカーが土ほこりをあ

げて往来し、多数の湿原植物が消滅した。クロミノウグイスカグラは、郷土の名菓ハスカップ羊かんなどの原料に使用されているが、ことしは原料不足のため製菓業者は専用のハスカップ栽培園をつくって、原

料確保につとめるといふ。苦小牧郷土文化研究会では、早くからこの実情を新聞、会報、研究誌などを通して訴え、植物はもちろん野鳥、小動物の保護もふくめ運動を展開してきている。

また、ウトナイ湖周辺は野鳥の棲息地として知られている。

夏の野鳥としては、アカエリカイツブリ・アオサギ・ヨシガモ・マガモ・カワアイサ・チュウビ・トビ・コチドリ・イソシギ・オオジシギ・キジバト・カッコウ・ツツドリ・ハリオアマツバメ・アマツバメ・シジュウカラ・ヒヨドリ・クロツグミ・アカハラ・ノビタキ・センダイムシクイ・ウグイス・ヤブサメ・エゾセンニユウ・マキノセンニユウ・コヨシキリ・キビタキ・オオトリ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・モズ・アカモズ・コムクドリ・カワラヒワ・シマアオジ・アオジ・ホホジロ・ホホアカ・オオジュリン・スズメ・ハシブトガラス・ハシボソガラス・アカゲラが確認されている。

冬の野鳥としては、マガン・ヒシクイ・マガモ・オナガガモ・ヨシガモ・ヒドリガモ・スズガモ・カルガモ・ミコアイサ・カワアイサ・オジロワシ・オオワシ・チュウヒなどが湖上にぎわす。

冬の野鳥でもっとも人目をひくのは、多

いときには三〇〇羽も集まるオオハクチョウである。ハクチョウは、ウトナイ湖を仲間地として本州へ往復しているが、心ないハンターに撃たれたり、湖面全面結水で食を断たれて餓死するものも多く、愛鳥家を悲しませていた。

昭和三十六年、こうした白鳥を守ろうと市役所、市教委、観光協会、狐友会郷土文化研究会などの野鳥保護に関心を持つ人々によって白鳥保護委員会が結成された。現地のウトナイ・ユースホステルを基地として、観測塔、観測小屋がたてられ、生態観察がはじまった。委員会の小野事務局長（図書館長）・伊賀幹事（ユースホステル・ペアレント）らによる餌づけも試みられた。市内はもちろん全道・全国の小中学生から茶がら、トウモロコシなどが事務局に寄せられ、白鳥保護の関心はたかまった。

昭和四十年一月、保護委員は「苦小牧の白鳥」と題する白鳥調査報告書を発行するまでにいたった。ついで二月には「都市の自然美を守る道民のついで」で、郷土文化研究会の畑宮事務局長（苫西高学教諭）が「ウトナイ湖の自然を守ろう」と発表して道民の関心を集めることになった。

これらの実績が認められ、白鳥保護委員会は日本鳥獣保護連盟から、四十年五月に鳥獣保護功労団体として表彰を受けた。つ

いで六月、ウトナイ湖は鳥獣保護区に指定された。ハクチョウをはじめ、ウトナイ湖周辺の野鳥保護関係者にとっては、またとない朗報であった。

③破壊されたアオサギ営巣地

市街地の東方約三キロ、国道三六号線・明野橋バス停留所の北方三〇〇メートルほどの湿原にアオサギ営巣地がある。郷土文化研究会では、昭和三十八年から本格的にアオサギ営巣地の調査を開始した。数度の調査によって、つぎの事情が判明した。

一、営巣地の数と面積

一号営巣地 不明
二号営巣地 五四〇坪
三号営巣地 二一〇坪

二号地と三号地は隣接しているので、

両方をあわせて約三、〇〇〇坪。

二、巣の数(昭和三十九年の調査)

一号営巣地 八
二場営巣地 七四
三場営巣地 六

三、アオサギの数(昭和四十年の調査)

合計して親どり九〇羽、ひなどり一五〇羽、計二四〇羽と推定された。

この調査と並行して、苫小牧港掘りこみの土砂が原野に捨てた作業がはじまった。はじめは市街地の近くから、だんだんアオ

サギ営巣地に近づいてきた。そのたびに郷土文化研究会は、新聞・テレビなどを通して営巣地の保護を訴えてきた。

ついに本年、三つの営巣地のうち、第三営巣地が破壊されて埋めつくされ、一番大きな第二営巣地のすぐそばまで車が入り短くつのまま営巣地に入るといふ最悪の状態となった。心ない人々が卵をとったりアオサギに石をぶついたりしたら、アオサギは営巣地を去ってしまう危険性もある。一刻も早く保護区に指定してもらい、高いサクをめぐらすなどの手段を講じたいものである。読者各位のご協力を切望する。

④野鳥天国・坊主山

市街地付近にみられる野鳥を紹介する。

△東部郊外▽

中野、明野など新興の住宅地付近では、ノビタキ・ハクセキレイ・ヒバリが多い。すこし離れたオオジシギの独特の羽音、カッコウの声も聞くことができる。日軽金工場用地付近にはエゾセンニュウが多い。

△西部郊外▽

糸井、錦岡の住宅地付近では、ノビタキ・ヒバリ・ホホジロ・アオジ・ウソ・シジユカラ・コガラ・カッコウなどがよい声を聞かせてくれる。近く大改修が予定されている有珠川には、コヨシキリが毎年営巣し

ている。上空にはオオジシギ、海岸にはトビが多い。

△海岸部▽

市内の海岸線一帯にはカモメ、ウミネコの類が多い。苫小牧港内にウミアイサ・ウミウを見ることもある。アホウドリが迷ってきたこともあった。

△市街地▽

王子製紙正門通りの街路樹や、西町住宅街には毎年かならずキレンジヤクがやってくる。冬のツグミ、夏のハクセキレイも常連である。ベニヒワもときどきみかける。

△北部郊外▽(坊主山)

鳥獣保護区なので、すぐ下の佐羽内沼を含め野鳥の数はかなり多い。

ツグミ、アカハラ、クロツグミ、コムクドリ、ムクドリ、シジュウカラ、コガラ、シマエナガ、シロハラゴジュウカラ、ヤマガラ、ノビタキ、キビタキ、アオジ、ホホジロ、ウグイス、ヒバリ、コヨシキリ、オオヨシキリ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、モズ、シメ、カラフトスズメ、トビ、ミヤマカケス、コウライキジ、エゾゴケラ、エゾオオアカゲラ、オオジシギ、ツツドリ、カッコウ、キジバト、マガモ、キンクロハジロ。

以上の三十四種が確認された。

このように市内には多数の野鳥がやって

くるが、ゴミ処理の近代化、住宅街の拡張などで、エサ場・営巣地を奪われ、その数は減少しつつある。

幸い坊主山は保護区のため野鳥の数も多く、近くの啓北中学校は昭和四十二年度に愛鳥モデル校に指定され、保護活動も活発化してきた。郷土文化研究会でも、日本野鳥保護連盟の依頼によって昭和四十二年一月から四十二年二月まで、坊主山の野鳥生態調査を実施したばかりである。

⑤沿岸海浜植物

中居正雄氏は、苫小牧市内の海岸の植物をたんねんに調査し分布図を完成した。七月上旬から八月中旬に開花しているものを主として調査し、六九科一八一種を、色刷の地図に表現した労作である。

ハマナス・ハマエンドウ・ノコギリソウ・エゾニュウ・エゾカワラナデシコ・ウラボシ・イブキボウフウ・ウンラン・エゾノカワラマツバ・オオマツヨイグサ・カセンソウ・コウボウムギ・クサフジ・キリンソウ・ハマボウフウ・ヒロハクサフジ・マルバトウキ・ハマニンニク・ハマニガナ・ハマヒルガオ・シロヨモギ・スキキ・センドイハギ・シルウメモドキ・ナミキノソウ・ツリガネニンジンが、糸井・勇弘間の代表的な海浜植物とされている。

糸井地区は護岸工事・住宅地化がすすんでいるので、これら植物のうち相当数が消滅していると思われる。勇払海岸は石油基地・工業港区の掘りこみにもなっており、今後、急速に変化していくことであろう。

築港工事、護岸工事が相手だけに、これら海浜植物の保護は実現不可能と数年前から考えられ、せめて植物群落の正確な分布記録を残そうという郷土文化研究会の目標が中居氏の研究成果となったものである。

へむすび

以上、苦小牧における自然保護の実情を述べたが、このように書きつづけても、これが一つの大きな社会的共鳴となり、マスプロ的鯨波になってユサブリができるなどとは思わない。要は、新産業都市に住みついている人間の一人一人が、自然と人間が四季を通じ自らの生命力を培う根源であり幾千年の永きにわたり、自然環境が与えた人類への神秘的偉大さを身をもって理解することである。

視野を広げるならば、中共の考古学者たちが文化大革命のさなかに北京原人の新しい頭蓋骨を発掘するのに成功していることや、西安の半坡（パンポ）遺跡に東京都体育館ほどの広大な屋根をかぶせ丸ごと保存していることなど、中国人は中国人なりの歴史保存に心血をそそいでいる。これは人

間の歴史の保護の一面ではあるが、保護という立場から考えるならば、わが国とは比較にならない違いを痛感するものである。

ごく最近では、湿原植物の宝庫・日光国立公園内にある尾瀬が原が観光客の大群にふみ荒され、いま手を加えない復元が不可能と伝えられている。

北海道でも開発という言葉が盛んに使われているらしいが、開発という言葉はなにも経済・産業だけに限らない。自然の美しさを開発することもその一つであるし、もっと大事なことは、素朴な心をはぐくみ育

てることのように思われてならない。

北海道を離れて四〇年、小樽出身の京都大学・岩村忍教授は「春には燃えるような緑、夏は日が長く、秋は清涼、冬は真白という四季にはつきりしたけじめのあるのはよいものである。人生も少年も少年らしく壮年は壮年らしく、老年は老年らしくありたいように」といつている。

自然のたまたまいがどれだけわれわれ人間を人間らしくしてくれるか、この自然の中に生きとし生ける生物のかずかずが、人間の魂をゆさぶりつづけ、生きる喜びを与

えつづけてくれることであるか。

われわれはいま、北海道の自然を、住める郷土の自然環境を五〇年・百年の後世に存続できるように、偉容を整えるべきである。

〔この報告は、まえがき・むすびを門脇松次郎（苦郷文研会長）が、①から⑥までの実情と保護対策を畑宮清一郎（苦郷文研事務局長）が、それぞれ分担執筆したものである〕

ビジターセンター

自然公園を利用する人々に対して、公園内の自然、人文についての正しい知識を普及するとともに、適正、かつ効果的な利用の方法を指導するための総合的施設である。

わが国ではアメリカの国立公園の例にならって、近年、日光、富士箱根伊豆、霧島屋久などの国立公園の集団施

設地区内に七カ所整備されており、北海道でも阿寒湖畔に設置されている。

この施設は、百ないし二百人収容の講義室、博物館展示室、休憩所、案内所、便所などを備えているが基本型で、場合によっては、救急室、郵便局、管理事務所などを付帯することもある。もともと、これに類似した施設として、管理休憩舎がいくつか設けられていたが、実際は管理事務所としての機能を果たすだけで手いっぱい、利用者にとつてかならずしもはいりやすいもの

ではなかった。

ビジターセンターで、利用者に応待したり、講義をしたりする人は、ナチュラリストとして公園内の自然、人文科学の精通者であるとともに、研究者であることが要求されている。

ただし、わが国の場合アメリカのように自然教化の目的をあまり強く押し出すと、利用者になじめないおそれがある。現在では利用者が気軽に立ち寄り休憩したり、情報をえたりできるように配慮が特にいらわれている。